◆武家の古都 鎌倉・市民の会連続シンポジウム 22◆

女性円卓会議「日々のくらしと鎌倉の世界遺産」

平成24年10月21日（日）、建長寺・応供堂で、鎌倉の世界遺産登録をめざす市民の会主催・推進協議会共催のシンポジウムが開かれました。

鎌倉で活躍する7人の女性たちの円卓会議という趣向で、阿曾千代子さん、アルバレス湊万智子さん、卯月　文さん、島津克代子さん、高木治恵さん、牧田知江子さん、山村みや子さんが参加し、司会・進行は鎌倉FMキャスターの能登原秀実さんが務めました。（順不同）

女性らしい現実感覚を通して、鎌倉の過去から未来に亘る様々な見識が交わされ、終始なごやかさと笑いに包まれた会議でしたが、いかにも禅宗らしい簡素で重厚な応供堂の雰囲気と不思議に調和していました。以下、概要を記します。

○牧田さんによる問題提起

人も自然も町も変化していくもので、鎌倉の町がより魅力的に変化するために、なにが必要なのか、次世代に鎌倉のどんな姿を引き継ぐべきか。

○出席者の自己紹介と提言

「常盤道普請の会」の山村さんは、常盤山の活用などを考え、史跡を含めた地域の未来を市と協働して進めなければならないという。

鎌倉の文化活動の拠点をめざす「北鎌倉たからの庭」を主宰する島津さんは、鎌倉には他の地域にはない空気感があって、それがキリスト教や仏教という宗派や宗門を超えて行われた慰霊・復興の祈願を成り立たせており、そうした文化が鎌倉を造っているという。

牧田さんは鎌倉市民の文化という意識で「井上蒲鉾店」を経営しているが、ビジネスを鎌倉の景観や文化とのつながりの中で考えることにより、住むにふさわしく訪れてよい鎌倉にしたいと述べる。

写真家で鎌倉の景観を研究する高木さんは、鐘の音や潮の香りまで含めて景観を深く捉えているが、景観を護ることや、武家の精神を説明することの難しさを指摘する。

若い芸術家などの協力を得て「カフェ鎌倉美学」を立ち上げたアルバレス湊さんは、そこを芸術家たちや、鎌倉を愛して訪ねてくる人と地元の人との交流の場として発展させることをめざすと述べる。

「図書館とともだち・鎌倉」の阿曾さんは、ユネスコの図書館宣言の精神を取り上げ、公共図書館の重要性を主張、図書館を支えるヒト・モノ・カネの3要素の内、決め手になるのはヒトであり、弱い立場の人のセーフティネットとしての図書館であるべきだと述べる。

長年世界遺産に関わる活動をしてきた卯月さんは、世界遺産の目的は、鎌倉の市民憲章の具現化以外のなにものでもなく、それと世界遺産条約の前文をすり合わせた時、平和の問題が浮上、戦争などの破壊から文化遺産を守ることこそ市民憲章に合致するという。

○意見交換

鎌倉の何をひき継いでいくべきか

鎌倉の景観は市民運動によって築かれてきた。その積み重なりが世界遺産に他ならない。そうした市民の精神を表した市民憲章を語り合う機会があってもよい（卯月）。

宿泊施設について

鎌倉は宿泊施設が少ない、特に外国人をゆっくり滞在させたい（島津）。寺に宿泊させる方法があるのではないか（卯月）。深沢地区にホテルを誘致してはどうか（山村）。古民家を外国人の宿泊や文化の交流に使うのも、鎌倉らしくしていく方法となるのではないか（牧田）。

開発と保全

ビジネスプランを提供することで再開発を防ぐことが可能、余った部屋を宿泊などに使用すれば、所有者は転居しなくて鎌倉に住み続けることができる、市が窓口となって家や離れなどを提供する人を募る方法もある（アルバレス湊）。深沢・大船地区に宿泊施設をつくるなど、バッファゾーンから抜けているところを開発して、若い人たちの雇用を生み出してはどうか（高木）。アーティストの活動や工芸、芸術が集うのも鎌倉の特質（牧田）。白川郷では地域の文化を若者が作り上げている。かならずしも開発がよいのではなく、若者の生活の問題は、古来の文化を引き継ぐ中で解決すべきで、そうした誇りある宿題を残すのがポイントである（卯月）。

まとめ

11月上旬に京都で世界遺産条約40周年集会がある。テーマは〈持続可能な発展・地域社会の役割〉であり、本日話し合ったことはまさにそれであると思う（卯月）。